

## 「イスカリオテのユダ」

2021年12月08日

その時、十二人の一人で、イスカリオテのユダという者が、祭司長たちのところへ行き、「あの男をあなたがたに引き渡せば、幾らくれますか」と言った。そこで、彼らは銀貨三十枚を支払った。その時から、ユダはイエスを引き渡そうと、機会をうかがっていた。(マタイ福音書 26 章 14 節～16 節)

イスカリオテのユダは、主イエスに弟子として召し出されたにもかかわらず、師を裏切ってしまった。聖書では「裏切った」ではなく、「引き渡した」という言葉が使われているが、引き渡して、裏切ったことに違いはあるまい。なぜ、引き渡したのか。神が、ユダを用いて、主イエスを十字架につける者として、当初から計画され、弟子に召されたという説がある。しかし神は、人格を無視して、ロボットのように人を動かすことはない。ユダは決断して弟子になり、自分の意思で師を「引き渡した」のである。

引き渡すようになった理由を、福音書から三つ考えられると思っている。第一の理由は、彼は金銭に執着し、お金目当てであったと考えられる。ヨハネ福音書では、ベタニアのマリアが非常に高価な香油を、主イエスに注ぎかけた時、ユダは「なぜ、この香油を三百デナリオン（1年分の生活費）で売って、貧しい人々に施さなかったのか」と正論を吐いているが、彼は、貧しい人に心をかけていたのではなく、金入れを預かり、中身をごまかしていたので、自分のものにしようとしていたと伝えている。共観福音書では、ユダは祭司長の所に走り、主イエスを引き渡せば幾らくれますかと問い、銀貨 30 枚を受け取っている。引き渡しは、金銭を得るためと見ることができる。しかし、宣教団の金入れを預かって、貧しい会計であるし、銀貨 30 枚（奴隷一人分）も目が眩むような額ではない。金銭目当てが引き渡しの十分な理由とは思えない。

第二の理由は、感情的な行き違いである。弟子たちはガリラヤ出身の庶民で、仲間意識を持って良い関係を作っていた。ユダはユダヤ出身で、一目置かれたインテリであったが、いつも一人浮いた存在であった。主イエスの言動に感動し、尊敬はするが、感情的にしっくりこないものを抱えていた。尊敬が憎しみに転化し、その感情が爆発して、引き渡しの行動に出たという解釈もできる。

第三の理由は、ユダは自分が求めたキリスト像は主イエスが示したキリスト像と違うことに気付いたからである。ユダは、ローマの支配から解放する革命を起こすキリストを求めて、弟子になった。ところが、エルサレムに向かい、入ってからの主イエスの言動から、政治的解放者としてのキリストを期待することはできなかった。エルサレムの宗教事情を知るユダには、主イエスは殺されることは必至であると受け止めざるを得なくなった。それで、早めに引き渡せば、自分は関係ないものとなり、身の安全を図られる。彼は、夜のゲツセマネで、接吻する相手が引き渡すべき主イエスとする、複雑に屈折した心を持っている。理由を見極めることはできないが、私は第三の理由が、納得できている。

ところが、ユダは主イエスに死刑が宣告された時、良心が咎め「私は罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました」と、銀貨 30 枚を神殿に投げ込み、首をくくり、自死している。福音書も使徒言行録も、裏切ったユダに憎しみを持って描いている。ユダの裏切りは、全ての人の心の闇を表している。主イエスの赦しの福音は、ユダをも包んでいると理解して、間違いない。私でさえも、赦しに与っているのであるから。